

2010 年度共同利用・共同研究課題申請書（新規）

申請者(主査)： 塩原 朝子

1. 共同利用・共同研究課題名	
和文	インドネシア諸語の記述的研究：その多様性と類似点
英文	Descriptive Studies of Indonesian Languages; their variety and similarity
2. 研究期間	2010 年度～2012 年度 (3 年間計画)
3. 共同利用・共同研究課題を実施する専任教員	(氏名) 塩原朝子 (主査)
(同上)	(氏名) 呉人徳司 (副査：「言語データの加工、公開」に関して連携)
4. 共同研究員採択数	15 名程度
5. 共同研究員に求められる役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・メインテーマ「インドネシア諸語の態」に関して自身が研究する言語の情報を提供し、議論に参加すること、および、個人研究に基づく「サブテーマ」を提供すること。(主な参加者としては、インドネシアの個別言語の研究者を想定しているが、インドネシア以外のオーストロネシア諸語、インドネシア周辺のパプア諸語の記述的研究、および、「態」に関する類型論的研究を行っている方の参加も歓迎します。) ・自身のデータの汎用性のある形での加工、公開。(希望者のみ)
6. 共同利用・共同研究課題の概要 (400 字程度) (※要覧等広報の際にも利用・掲載します。)	
<p>本課題は、「インドネシアの言語」の研究の進展を目的とし、以下の2つの活動を行う。</p> <p>I. 研究者が個別言語の文法記述によって得た知見を集め、インドネシア諸語に関して個別言語間の相違点/類似点を明らかにする。メインテーマは「インドネシアの言語の態」とし、各言語の記述データを元に個別言語の記述手法ならびに、類型論的、比較言語学的事柄について議論する。インドネシアの言語において文法の根幹を成す「態」に注目することによって、付随的に「情報構造の標示」「時制・相・法」なども含め、インドネシア諸語の実相が広い範囲で明らかになることが期待される。なお、参加者の興味に合わせて、短期的な「サブテーマ」も設定する予定である。</p> <p>II. 本研究所の内部プロジェクト LingDy (『急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築プロジェクト』) 内の「DALD(Documentation and Archiving of Language Data)プロジェクト」と連携し、I の言語記述の前提である言語データの加工と公開に関わる作業を行う。</p> <p>なお、対象言語は、インドネシア国内で話されているオーストロネシア語を中心とするが、系統的特徴を共有するオーストロネシア諸語、地域的特徴を共有するパプア諸語も射程に入れる。</p>	
研究の目的 (400 字程度)	
<p>本課題の目的は、次の3点である。</p> <p>概要 I. に関して</p> <p>(1) 態に関連する事柄において、(i) 個別言語の事実を共有すること、(ii) 個々の言語あるいは言語グループの類型論的特徴を明確にすること、(iii) オーストロネシア祖語から現在の各言語 (グループ) に至るまでの歴史的経緯に関する仮説を提示し、インドネシア諸語の分類に関する現在の定説(例：Blust (1993), Grimes (1992), Aron (1990))の妥当性について検討すること。</p> <p>(2) メンバーである個別言語の研究者が、新しい記述的、類型論的、比較言語学的視点を共有し、各自の興味に沿ったサブテーマに関して、何らかの形で新しくとらえなおした記述を行うこと。</p> <p>概要 II. に関して</p> <p>(3) 文法記述の前提となる言語データを第三者が検証可能な注釈付きの形に加工した上で公開するノウハウを共有し、個々人のデータのアーカイビングを行うこと。</p>	

8. 研究の意義、特に共同利用・共同研究として展開することの意義 (400 字程度)

現在のインドネシア諸語研究は、先行研究や国内外の研究動向を共有しないまま、各研究者がそれぞれの興味のみに従って研究を進めている傾向が強い。本課題によって研究内容やデータ処理のノウハウを共有することによって、研究内容・技術の蓄積が可能になり、インドネシア諸語研究の分野としての成熟が見込まれる。より具体的なメリットとして以下の事柄が想定される。

- (1) 言語事実 (例：同根の接辞の分布や機能など) や先行研究に関して、研究会の場で様々な情報を一度に集めることができる。情報収集に費やす時間の短縮によって、対象となるテーマの解明に一定の進歩が見込まれる。
- (2) 他の研究者の興味の対象を知ることによって、参加者個人が新しい視野・論点を獲得し、自らの研究に資することができる。
- (3) 言語データの加工と提示のノウハウを共有することによって、類型論的対照研究や歴史的比較研究に役立つ汎用性のあるデータを提供することが可能になる。また、記述研究のソースを公開することにより、それに基づく文法記述の信頼度が向上する。

9. 共同利用・共同研究として期待される研究成果、および共同利用・共同研究効果 (400 字程度)

- (1) メインテーマ「態」に関して、論文を共同で執筆するか、相互に関連する一連の論文を発表する。
- (2) 各自が自身の興味に応じたテーマに関して (研究会への参加によってより広がった視野の下) 論文を執筆する。
- (3) 他の研究者が利用しやすい形に加工した、各自の言語データの公開。(言語データの内容は、デジタル化した音声データとそれに対応する文字データ (書き起こし、逐語訳、全文訳、文法的注釈) を想定している。データの公開形式は、6 で触れた DALD プロジェクトと共同で策定する予定。オンラインでの公開、所内に設置した HD 内における保管の両方を検討中。)

10. 研究の実施計画 (800 字程度)

年 6 回の研究会を行う予定である。内訳は以下のとおりである。

年 3 回 (5 月、9 月、3 月を予定) : 概要の I (「態」その他のテーマ) に関する研究会。各回 2-3 人の発表を予定。(多数のサブテーマが寄せられ、より多くの発表が行われることを期待している。)

年 2 回 (9 月、2 月を予定) : 概要の II (データの加工と公開) に関わる作業的ワークショップ。DALD と共同で他の地域の言語の研究者もまじえて開催予定。(平日開催)

年 1 回 : 海外からのゲストスピーカーを迎えた国際ワークショップ。

各年の予定は以下のとおり

1 年目 (2010 年度)

I. 参加者がそれぞれの研究している言語の「態」に関して (先行研究の内容も含め) 概略を提示し、それを材料として、類型論的、歴史的分類に際して有効だと思われる文法的基準 (例：個々の同根の接辞の有無、機能、主題化、適用化、名詞抱合などの現象の有無など) を抽出する。また、各参加者が「サブテーマ」として現在の興味の対象を提示する。

II. 今回行う言語データの documentation & archiving に関する規格を決める。

2 年目 (2011 年度)

I. 「態」に関して、一年目に設定した基準に合わせて各言語 (言語グループ) の特徴を明らかにする。また、それに関連付ける形で各自が自分のテーマを設定し、それについて研究をすすめる。また、引き続き、「サブテーマ」として各自の現在の興味の対象を提示する。

II. 1 年目に決めた規格に沿って各自が作業を行う (規格は必要に応じて修正する。)

3 年目 (2012 年度)

I. 各自が 2 年目に設定したテーマに関して研究を遂行し、完成を目指す。また、引き続き、「サブテーマ」として現在の興味の対象を提示する。

II. 引き続き言語データの処理作業を行い、アーカイブに収納する。

11. 研究成果の公開計画 (200 字程度)

2 年目までの成果を AA 研の言語学雑誌『アジア・アフリカの言語と言語学』の特集としてまとめる。

最終的な成果は、『インドネシア諸語の態 (仮題)』という本の形で研究課題終了後に公刊する予定だが、参加者が、より広い読者を得られるような査読誌への投稿を希望する場合はそれを優先する。(必ずしもまとまった形での公開にはこだわらない。ただし、成果物は特に著作権や倫理上の問題がないかぎり、東京外国語大学図書館リポジトリに登録し、公開することを求める。)

12. 応募者に求める提出書類

- ・この研究課題に関連する研究関心を具体的にまとめたもの。(A4 一枚程度)